



岐阜大学機関リポジトリ

Gifu University Institutional Repository

Title	創刊号によせて
Author(s)	中須賀, 徳行
Citation	[岐阜大学留学生センター紀要 = Bulletin of the International Student Center Gifu University] no.[創刊号] p.[1]-[2]
Issue Date	1999-03
Rights	
Version	岐阜大学留学生センター (The International Student Center Gifu University)
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12099/3337

この資料の著作権は、各資料の著者・学協会・出版社等に帰属します。

創刊号によせて

岐阜大学留学生センター長
留学生センター紀要編集委員長
中須賀 徳行

岐阜大学に省令施設の留学生センターが誕生してからおよそ2年半の歳月が過ぎ去りましたが、ここに紀要を創刊する運びとなりました。センターの最初の1年間の活動を記す年報は既に今年1月に創刊号を発刊し、第2号もこの10月に発行したのですが、紀要については延び延びになっていたため、一刻も早くと気になっていたところでした。

申し上げるまでもなく、留学生センターの主要な任務は外国人留学生に日本語・日本事情教育を施すことと、教育・研究上ならびに生活上の指導と助言を与えることです。それ以外に、留学を希望する日本人学生にアドバイスを与えるとか、広く国際交流の仕事もあります。この10月現在、岐阜大学には266名の留学生が在籍していますが、その多様な要望に答えるために、専任教官はもとより、留学生課の職員や非常勤講師の先生がたも多忙な毎日を送っており、自らの活動を振り返る余裕がなかなかなかったのが実状です。

どんな分野でもそうであるように、日本語・日本事情教育や留学生指導においても実践こそは最も貴重なものですが、そのありようを点検し、新たな方向を見いだしてさらに発展させようとするれば、理論的な裏付けと研究が不可欠です。無論それぞれの教師は大学その他の機関で既に研鑽を積み、実践的な経験も豊富ですが、それぞれの教育現場で具体的な事情は異なる訳ですから、各人が日々生起する問題を解決する理論的能力をさらに磨く必要があります。

そのために先達の著書や論文に学ぶことはもちろんのことですが、自分自身でテーマを持ち、現実の場面で実際にぶつかった問題を整理し、理論化していく作業が有効ですし、それを通して学会全体にも貢献できる訳です。

個人的な思い出になって恐縮ですが、20数年前に留学先のリヨンで私は当時一橋大学の憲法学の教授で、岩波書店から出ていた「国民主権の研究」の著者として知られていた杉原泰雄先生たちとワインを酌み交わしながらお話しする機会がよくありました。先生は、「ともかく若いときから大きなテーマをもち、その展望の中で具体的な問題を徹底的に追求し、豊富にしていく」ことを勧められました。実際先生は、フランスにおける国民主権の歴史的発展を辿る中で、日本における主権在民の有りようや、今日の憲法の在り方を真剣に探求しておられたのでした。

そういう正攻法他に、もう少し違ったやり方も有るかもしれません。先日柴田武氏の「日本語はおもしろい」(岩波新書)を読んでいましたら、氏は「つねひごろ二冊の手帳を持ち歩いている。(中略)もう1冊は、思いついたことをそのつど書きつける、日付のはいついていない厚手のもの。」といったことが冒頭に書かれてありました。また湯川秀樹博士が、寝起きの前後に思いついたことを、忘れない内に記すために枕元にメモ用紙を置いておられたということを読んだことがあります。

著作を読んでいるときや電車の中でふとある疑問にぶつかったり、こういう風に考えたらあの問

題は解けるのではないかと思いついたりすることがときどきあります。ところがそれはしばらくすると忘れてしまうことが多いので、メモにして残しておくことは確かに有用です。こうしたものが積み重なって、一本に理論化できたらすばらしいことです。

また留学生に教えているときに質問を受け、それまで考えもしなかった問題点にぶつかることがよくあります。ある時日本事情を教えていたら、一人の中国人留学生から「今まで権力を持っていた将軍はたくさんいたのに、なぜ天皇にとって代わろうとしなかったのか」と質問され、拳を突かれた想いでした。ところがその後、今さかんに日本史の見直しについて発言しておられる網野善彦氏が、以前まったく同様の質問を若い生徒にされて冷や汗をかいたと書いておられるのを読み、日本人の発想の盲点でもあったのかなと気がついたのでした。

ともかく私は質問に答えるためにもう一度日本史を勉強し直したのですが、教育と研究が不可分に結びついているというのはこういうことを言うのでしょうか。これまでセンターの先生方はなかなか発表する機会がなかったかもしれませんが、この紀要の場を大いに活用して日頃考えておられることをまとめ、世に公表していただきたいと思います。

この紀要は論文、報告、ノート、書評の四つのカテゴリーに分けられていますが、発表内容に特に制限は設けておりません。留学生センターの教官には日本語関係の人が多いのは当然としても、出身母体は様々なので、様々な分野の論文が現れることでしょう。問題は審査できる人がセンターにいるとは限らないということですが、その際はセンター外の教官にもご協力を賜りたいと考えています。

今までも日本語・日本事情関係の論文が岐阜大学の紀要に現れたことはあります。教育学部の国語教育や言語学関係、また以前の教養部の日本文学あるいは日本語・日本事情関係の教官がいくつかの論文を発表しておられます。しかし留学生関係の教師がこれだけまとまったのは岐阜大学としては初めてのことでですから、皆様の叱咤激励を受けつつ、独創的な素晴らしい論文が現れることを切に祈念して、発刊の辞といたします。

1998年11月30日